

神様は苦しみの中に

丸山 勉

[聖書] 創世記 21 章 9 節～20 節

サラは、エジプトの女ハガルがアブラハムとの間に産んだ子が、イサクをからかっているのを見て、アブラハムに訴えた。「あの女とあの子を追い出してください。あの女の息子は、わたくしの子イサクと同じ跡継ぎとなるべきではありません。」このことはアブラハムを非常に苦しめた。その子も自分の子であったからである。神はアブラハムに言われた。「あの子供とあの女のことで苦しまなくてもよい。すべてサラが言うことに聞き従いなさい。あなたの子孫はイサクによって伝えられる。しかし、あの女の息子も一つの国民の父とする。彼もあなたの子であるからだ。」アブラハムは、次の朝早く起き、パンと水の革袋を取ってハガルに与え、背中に負わせて子供を連れ去らせた。ハガルは立ち去り、ベエル・シェバの荒れ野をさまよった。革袋の水が無くなると、彼女は子供を一本の灌木の下に寝かせ、「わたしは子供が死ぬのを見るのは忍びない」と言って、矢の届くほど離れ、子供の方を向いて座り込んだ。彼女は子供の方を向いて座ると、声をあげて泣いた。神は子供の泣き声を聞かれ、天から神の御使いがハガルに呼びかけて言った。「ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子供の泣き声を聞かれた。立って行って、あの子を抱き上げ、お前の腕でしっかり抱き締めてやりなさい。わたしは、必ずあの子を大きな国民とする。」神がハガルの目を開かれたので、彼女は水のある井戸を見つけた。彼女は行って革袋に水を満たし、子供に飲ませた。神がその子と共におられたので、その子は成長し、荒れ野に住んで弓を射る者となった。

[序] アブラハムという名前

旧約聖書・創世記の**アブラハム物語**をこのところ読み続けています。**アブラハム**という名前は「アブ」が「父」、「ラハム」が「すべての、多くの」という意味があるそうですから、「**すべての者の父**」という意味を持っているようです (17:5)。

これはなかなか意義深い名前だと思います。よく「**信仰の父アブラハム**」と言いますが、それはむしろ後付けのような言い方で、私はアブラハムという人物を、何か信仰の英雄のように見るよりも、その名の通り、**私たちすべての人間の父**と受け止めて良いと思いますし、そう見ることで、生身持つ弱い私たち人間に、神様がどのように関わって下さるのが見えてくるような気がします。

[1] アブラハムの二人の子供

創世記 21 章では、アブラハムの二人の男子の子供が出てきます。1～9 節の所にあるのは、**イサク**の誕生の物語です。ずっと子供が与えられなかった妻サラとの間

に、神様が約束の子として与えて下さいました。イサク、それは「笑い」という意味を持っています。「神は私に笑いをお与えになった」(21:6)とサラは喜んでいます。

8節にはこうあります。「**やがて、子供は育って乳離れした。アブラハムはイサクの乳離れの日に盛大な祝宴を開いた。**」—乳離れ。2歳か3歳でしょうか。この成長してきた息子のために父アブラハムは盛大な祝宴を開きました。

しかし、今日のこの9節以降には、この祝宴には参加できなかったもう一人のアブラハムの子供のことが記されています。**イシュマエル**ですね。ここでは「**エジプトの女ハガルがアブラハムとの間に産んだ子**」となっていますが、これは、もうその時から15、6年前に、もう自分の体から子が生まれるなどとは不可能と思ったサラが、夫アブラハムに頼んで、ハガルという女奴隷との間に設けた子どもなのですね。そのイシュマエルという名は、「**神は聞かれる**」という意味だそうです。

今日読んで頂いた所は、このイシュマエルと母親であるハガルが、こともあろうに、**ベエル・シェバの荒れ野に追い出されてしまう**、という**残酷な話**です。なぜならサラは、その前に女奴隷のハガルがアブラハムとの間に子を宿すと自分のことを少々見下すようになっていたり(16章)、また今日の箇所では、幼い正真正銘の自分の子イサクに対して、一緒にいたイシュマエルがからかっている、或いは笑っているような様子を見て心穏やかになれず、これでは本来の跡継ぎになるイサクの立場が危うくなると思ったのでしょうか、アブラハムに「**あの女とあの子を追い出してください**」と強く願ったのです。

この後どうなったのか？ 聖書はこの親子の「**死への旅**」と言ったらよいでしょうか、この荒れ野での苦しい出来事を丁寧に描写しています。

実は、このハガルとイシュマエルの荒れ野追放の記事は、次の章の**アブラハムに対する、イサク奉獻の命令の出来事**と呼応しています。それも**もう一つの「死への旅**」と言ってもよいものです。その物語も後で触れたいと思いますが、まずはこの21章にあるメッセージは何なのか、私なりに祈りつつ考えてみました。

[2] 人間の罪がもたらす苦しみの只中で

この21章9節以下の、ハガルとイシュマエルの話の背景にあるのは、**人間の罪の現実**ではないでしょうか？ そもそもアブラハムは、創世記の15章で、「**あなたから生まれる者が後を継ぐ。あなたの子孫は、天の星のようになる**」(15: 4, 5)という**神様からの直接の言葉**を聞いているのです。しかし、この夫婦は**神様の計画を待たせませんでした**。ハガルによって子を設けたのです。いくら当時はこのようなことが当たり前のように行われていたとしても、人間の心は機械ではありませんから、どこかで綻びやしこりが生じます。そして**疑心暗鬼になったサラ**、また「**あの二人を追い出せ**」と妻に言われて**オロオロしてしまうアブラハム**の姿があります。彼らは、ハガルとイシュマエルの人生に苦しみを与える**加害者**になってしまったのです。

もしも、このまま追放された二人が荒れ野で果ててしまったのなら、こんな嫌な話はありませんね。しかし、この物語で私たちが見落としてはならないことは、このような罪がもたらす苦しい現実の只中に、**神様が確かに目を留めておられる、ご紹介されている、**ということではないでしょうか？実は、アブラハムも二人を追い出してしまったと言うのも、神様の言葉がそこにあった故なのですね。

12～13 節「**神はアブラハムに言われた。「あの子供とあの女のことで苦しまなくてもよい。すべてサラが言うことに聞き従いなさい。あなたの子孫はイサクによって伝えられる。しかし、あの女の息子も一つの国民の父とする。彼もあなたの子であるからだ。」**

アブラハムも苦しかったと思います。涼しい顔で追放したとは思えません。けれどもアブラハムは、**神様の言葉に自分と二人を託したのだ**と思います。「本当にこれでよいのだろうか」と、完全に神様の思いを理解は出来なかったに違いありません。しかし、「**理解**」ではなく、**彼は、神様だったら神様の仕方で責任を取って下さるとい**う、**全き「信頼」**をすることが出来た。その後神様は、ハガルとイシュマエルを滅ぼされたでしょうか？ 素晴らしい言葉を、神様は御使いを通して語られました。

21：17～19『**ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子供の泣き声を聞かれた。立って行って、あの子を抱き上げ、お前の腕でしっかり抱き締めてやりなさい。わたしは、必ずあの子を大きな国民とする。』神がハガルの目を開かれたので、彼女は水のある井戸を見つけた。彼女は行って革袋に水を満たし、子供に飲ませた。**」本当に慰め深いことばだと思います。

「死」が支配しているとしか思えなかった世界が、神様が目を開かせて下さったので、「命の水」が**その現場に湧いている事**に気付いたのです。「**革袋に満たし**」というのが良いですね。命の水は溢れたのです。起死回生とは、このことですね。

人間の罪の現実には、**神様ご自身が平和の解決を**与えて下さいました。

[3] 不条理の苦しみの只中で—イサク奉獻の物語—

そして **22 章**も見てまいりましょう。『聖書教育』誌では昔扱ったことがあるからなのではないでしょうか、ここを飛ばしていますけれども、やはりこの箇所はアブラハム物語のハイライトだと思います。

神様ご自身が、あの祝福を受け継ぐべき**イサクを、神への焼き尽くす献げものとして捧げなさい、**という命（めい）です。やっとならされた愛する子です。それをあなたの手で燔祭とせよ、とは**不条理極まりないこと**ではないでしょうか？しかし、アブラハムはこの時、黙々とこの言葉に従っています。イシュマエルの時もアブラハムは非常に苦しんだ、とありました。しかし、このイサクの時は何もその記していません。苦しまなかったのでしょうか？そんなことはないでしょう。**三日間、アブラハムは神様が示されたモリヤの地**に向かってろばを引きながら歩を進めたのです。

このモリヤの地は、アブラハムの旅の到達点なのかもしれない、と思いました。彼は 12 章で「**あなたは生まれ故郷父の家を離れてわたしの示す地に行きなさい**」と神様に言われ、「**アブラムは、主の言葉に従って旅立った**」とあります。それが**原点**です。しかし、その後もエジプトに逃れたり、自己保身から妻を妹だと二度も偽ったり、そのサラと側女ハガルの間でオロオロしたり、「**信仰の英雄**」と言うよりも、どこか**危なっかしい歩み、旅をしていた**ように思えるのです。神様はアブラハムに、今この時、**原点回帰**を、あなたは**本当に主の言葉だけを聴いて従うことができるのか？** と、アブラハムを愛するがゆえに問われたのではないのでしょうか？

アブラハムはここでも神様の真意を、本当の御心を理解出来るはずはありませんでした。あなた自身に等しい、愛する息子イサクを献げよ。これは殆ど狂気の世界と言ってもいいかも知れません。けれども**アブラハムは前に進みました**。ここではサラの姿は消えています。**独り**です。内容はともかく、もしかしたら神様は自分に新しい要求をしてくるかもしれない、とそんな思いがどこかにあったのかも知れません。そして**彼は三日間、祈りつつ進んだ**のでしょう。私は思うのですが、**祈り始めること自体がもう前進**ではないのでしょうか？ 私たちの信仰生活も同じですね。祈りというのは、前を向くことです。私自身の今度の、この川越教会で主のために仕えます、という献身も、祈りの中での前進に他なりません。

アブラハムは、あのハガルとイシュマエルの出来事を経て、**理解出来なくても、神様は必ず神様のなさり方で責任を取って下さるのだ、と信頼すること**を学んだ、体験したのだと思います。これは、理屈では説明がつかないものです。

そして事実、あの**ハガルとイシュマエルの物語**と**イサク奉献の物語**には多くの共通点を見ることが出来ます。それを少し見てみたいと思います。

まず初めに、21:14 の方には「**アブラハムは、次の朝早く起き、パンと水の革袋を取ってハガルに与え、背中に負わせて子供を連れ去らせた**」とあり、22:3 には、「**次の朝早く、アブラハムはろばに鞍を置き、献げ物に用いる薪を割り、二人の若者と息子イサクを連れ、神の命じられた所に向かって行った**」とあります。どちらも、この旅の発端は**朝早く**のことでありました。

そして物語のクライマックスも「もうこれ以上は先がない」という所で、神様の御使いの声が響いてきています。21:16 以下には、

「**彼女は子供の方を向いて座ると、声をあげて泣いた。神は子供の泣き声を聞かれ、天から神の御使いがハガルに呼びかけて言った。「ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。」**とありますし、22:10 以下には、「**そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。そのとき、天から主の御使いが、『アブラハム、アブラハム』と呼びかけた。彼が、『はい』と答えると、御使いは言った。『その子に手を下すな。何もしてはならない。』**」とあります。

また、声だけではありません。21:19には「**神がハガルの目を開かれたので、彼女は水のある井戸を見つけた**」、22:13には、「**アブラハムは目を凝らして見回した。すると、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼き尽くす献げ物としてささげた。**」と、かたや**命をつなぐ井戸の存在、かたや子供の身代わりとなる雄羊の存在**を認めることが出来ました。

更には、それぞれの物語に「**祝福**」の言葉が与えられています。

21:18には「**必ずあの子を大きな国民とする**」。そして22:16～18にはこうあります。「**御使いは言った。『私は自らにかけて誓う、と主は言われる。あなたがこの事を行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかったので、あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る。地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。』**」

どちらの物語いづれも、**神様が主導権を握り、神様が解決を与え、人間を祝福する、という話**なのです。人間がすべきことは、その**神様の言葉に「明け渡す」**ことです。明け渡さないから、神様を中心に据えないから、人間同士の諍いが起こるのです。

[4] 誰よりも不条理を痛み、担っておられる神

人間の罪の現実を貫いて、神様は互いが生きる平和の道を備えて下さいました。そして、「**神などこの世界にいない**」と思える**不条理極まるこの世界**を、**実は神様ご自身が誰よりも深く痛み、担っておられる**ことを私たちは知らされるのではないのでしょうか。アブラハムは、自分の苦しみを通して、神様の深い御旨の一端を味わわされたのではないのでしょうか。

神様はここで人間に—アブラハムに—自分の愛する子を献げることはなさいませんでした。「もうよい。あとはわたしがする。」と、私たち全ての人間のために**ご自分の独り子を、十字架の上で生け贄**とされたのです。

15:6に、「**アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた**」とあります。私たちが主を信じる時、変な言い方かもしれませんが、**神様の方が**私たちに**太鼓判**を押して下さるのです。神様との契約関係です。でも不思議ですね、これは、神様の方が一方的に責任を取って下さる契約関係なのです。保険会社でしたら、商売になりません。けれども、神様は私たちを愛して愛して止まないお方なのです。私たちの信仰の強さとか立派さではなくて、契約してしまった、約束してしまったその神様の側の力が確かですから、私たちは安心してこのお方を信頼してゆけばよいのではないのでしょうか。その道をアブラハムはご自分の試練を通して作ってくれた、と言えるのかも知れません。その意味では「**信仰の父**」と言って良いのでしょうかね。

[結] すべての悩みのとき、主も悩まれて

イザヤ書の 63:9 にこのような素晴らしい言葉があります。それを口語訳でお読み致します。

「彼らのすべての悩みとき、主も悩まれて、そのみ前の使を持って彼らを救い、その愛とあわれみとによって彼らをあがない、いにしえの日、つねに彼らをもたげ、彼らを携えられた。」

主は、この世の現実のただ中に生きていて下さいます。神様は、アブラハムの主、ハガルの主、イシュマエルの主、私たちのどんな人生の局面にも、主は一緒に悩んでくださるお方です。約束して下さった方は真実なお方ですから、揺れ動く時にも、あの十字架と復活の主が私たちを支えていてくれることを忘れないで行きたいと思います。

「あなたはわたしを顧みられる神（エル・ロイ）、そして全ての人を顧みられる神様です。」

お祈りを捧げます。